

令和7年度 学校安全総合支援事業（学校安全体制の構築）の最終報告
学校名 （ 大分県立盲学校 ）

1 学校の情報

（1） 学校規模

児童生徒数 15名

（小学部 5名、高等部10名）

（2） 分掌の位置づけ

活動支援部（生徒指導部）所属

防災教育コーディネーター 1名

（3） 地域環境

県内唯一の視覚障がい教育領域の特別支援学校であり、近隣には大分市立金池小学校や住宅やビルが建ち並ぶ、海拔約5メートルの大分市金池町に位置している。豊後大野市や国東市など、県内各地から幼児児童生徒が入学してくるため、自宅からの通学生だけでなく、寄宿舎で生活をする児童生徒もいる。全盲や弱視といった視覚障がいだけでなく、知的障がいや肢体不自由を併せ有する児童生徒が在籍しているとともに、教職員の中にも、視覚障がい当事者の職員が勤務していることから、発災時には、避難行動に時間を要することが想定される。地震発生時の津波や大分川の河川氾濫による0.5m～3mの浸水想定区域内に位置しており、校舎1～2階部分の浸水被害が想定される。土砂災害の警戒区域外となっているが、在籍する児童生徒の居住地域は広範囲にわたるため、発災時には、把握すべき情報は多岐に渡る。そのため、地震や水害を主とした防災教育の在り方や、児童生徒の登下校時に発災した時の対応、学校待機となった場合の備え等について検証するとともに、児童生徒や保護者、地域の防災意識を高める実践的研究を行うのに適する学校である。また、聾学校と併置されており、聴覚障がいや有する幼児児童生徒・職員との協働・連携の在り方を検証する必要もある。なお、盲聾共用寄宿舎は、大分市の指定福祉避難所として利用するための協定書を締結している。

見えにくさにより想定される困難に事前に備えることや、情報伝達や、避難行動の支援体制など、視覚障がいのある児童生徒・職員特有のニーズに対応できる学校体制を整えることを目指して、防災教育コーディネーターを中心として以下の取組を行う。

2 取組のポイント

将来にわたって自分の身を守るために ～「備える力」と「対応力」の向上～

（1） 児童生徒

防災教育の視点を取り入れた授業や行事（避難訓練など）を通して、日頃からどのような備えが

できるか、実際の災害発生時にどのような行動を取ればよいか、自分事として考え、行動することができるようにする。

(2) 教職員

教職員研修や様々な場面想定での訓練を通して、組織の一員として危機管理意識の向上を図るとともに、自分の身を守りながら、児童生徒の安全を保障するために必要な知識・指導力、対応力を高めることができるようにする。

(3) 保護者

居住地避難所の確認や個別避難計画などの制度を知る保護者研修会や引き渡し訓練を通して、災害発生時の行動を考え、備えることができるようにする。

3 具体的な取組

実施時期	実施事項
5月27日	・合同避難訓練（地震） 【参加人数：教職員30名、児童生徒15名】 盲学校・聾学校合同で、活断層型地震を想定し、一時避難場所である共用グラウンドに避難する訓練を行った。
6月30日	・第1回防災教育モデル実践事業校内委員会 （取組の方向性や実施内容、中核教員の役割の確認）
8月21日	・不審者対応合同訓練（職員のみ・盲聾合同） 【参加人数：教職員40名】 聾学校へ不審者侵入を想定し実施。 アンケート ・防災研修（職員） テーマ：「災害から身を守る」防災基礎講座 講師：大分県防災活動支援センター 川村正人氏 【参加人数：教職員40名】
9月12日	・第1回防災教育実践委員会開催 （大分県のモデル事業の説明、本校の取組の方向性や実施内容について） 

9 月 22 日	・引き渡し訓練（職員のみ） 【参加人数：教職員 30 名】 当初 3 学期開催予定（2 学期末実施）の保護者参加型引き渡し訓練へ向けての職員訓練を行った。
10 月 15 日	・防災避難訓練（職員）地震・津波 【参加人数：教職員 35 名】 11 月実施予定の「防災避難訓練（地震・津波）」へ向けて、避難場所変更に伴う避難経路の確認を職員のみで行った。
11 月 6 日	・熊本城復興見学【参加人数：教職員 6 名、生徒 4 名】 九州地区盲学校音楽大会（熊本大会）参加の際、熊本地震の被災状況と、熊本城の復興の事前学習を行い、実際に熊本城の見学を行った。
11 月 19 日	・防災避難訓練（生徒・教職員）地震・津波 【参加人数：教職員 35 名、児童生徒 14 名】 地震発生後の津波を想定し訓練を行った。 点呼の方法を改善が必要。
11 月 29 日	・第 2 回防災教育モデル実践事業校内委員会
12 月 24 日	・引き渡し訓練（保護者参加型） 【参加人数：児童生徒 12 名、保護者 6 名、教職員 35 名】 視覚障がいのある保護者もいるため、保護者の動きの確認を主に実施した。

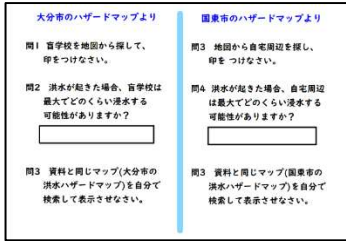
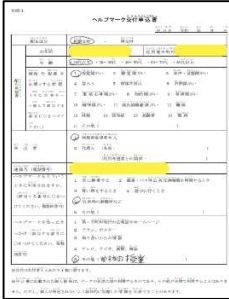
12月24日	・防災研修【参加人数：生徒3名、保護者6名、教職員35名】 テーマ：「家庭で行う防災」 講師：大分県防災活動支援センター 川村正人氏 【参加人数：教職員40名】  
1月7日	・発電機使用方法研修 発電機の使用法について職員間で研修を行った。 【参加人数：教職員15名】  
	・防災意識アンケート【教職員】
1月21日	・合同（盲聾）防災避難訓練（地震火災）
1月27日	・生徒会オンライン交流会[熊本県立盲学校] 【参加人数：生徒4名】 熊本県立盲学校と防災についての話題を中心に交流を深めた。  
2月6日	・第2回防災教育推進委員会への参加 ・防災対策委員会 防災に関する本年度の取り組みの反省と次年度へ向けての協議を行った。

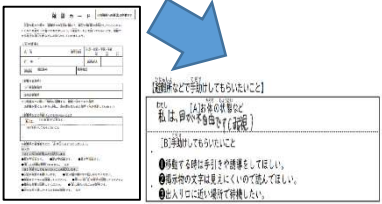
2月18日	・第2回防災教育実践委員会開催 (取組の中間報告検討、訓練内容の報告) 
2月24日	・生徒会オンライン交流会（宮崎県立明星視覚支援学校） 【参加人数：生徒4名】   宮崎県立明星視覚支援学校と防災についての話題を中心に交流を深めた。
2月～3月	・全国成果発表会へ参加 ・取組の最終報告 ・実践事例集の原稿作成

授業実践

学部	教科等	題材名	児童生徒の様子・教材
高等部	総探普3	「防災リュックの点検と改善」 *防災リュックの中身を点検し中身を改善した ・他者のリュックと比較することで、自分の防災リュックの良い点、改善点を考えることができていた。	

総探 普 3	「防災食の食事計画」 ＊自分の防災リュックに入っている３日分の防災食を、９回分の食事に振り分けさせ、避難時の食事を具体的に想定する。 ・保護者と生徒とが防災リュックの中身や、食事の内容について話し合う契機となった。 ・教師からの助言で、被災直後の心理、被災２日目の心理、また救助の状況などを考えながら、食事計画を立てることができていた。	
総探 普 3	「防災リュックのネームタグ作り」 ＊混乱した災害時でも自分のリュックを素早く探せるように、リュックにネームタグをつける。 ・視覚障がい者にも分かりやすいタグのデザインとタグに書く内容を考える。自分の見え方（弱視）や、後輩が点字利用者であることを考えながら、ネームタグのデザインを考えていた。 ・自分の分だけでなく、普通科の生徒と教員の約１５名分のタグを作成した。時間がかかったが、作業をやりとげることができていた。	完成品  工夫した点 ＊盲学校以外の人も避難所にいるかもしれないので学校名を書いた。 ＊職員か生徒かわかるように書いた。 囲み枠の色を変えた。 ＊大きい文字で作った。 ＊点字利用の人にも分かるように点字を貼った(２年生に依頼) ＊人ごとにマークをつけた(目印)

	総探 普 3	「ハザードマップの見方」 ＊地図から、自分の居住地を探す。(自宅と学校(盲学校)の2種類の地図を使用)。 ハザードマップで洪水時の浸水の深さを確認する。自分の iPad で、居住地のハザードマップが掲載されているサイトに実際にアクセスする。 ・弱視であるため、地図を俯瞰して見るのが難しく、地図から自宅や学校の場所を探すのに時間がかかった。 ・卒業後に一人暮らしをする際、どのような視点で住む場所を考えるべきかなど、将来の暮らしを想定しながら、ハザードマップの役割や見方を学習することができていた。	  ワークシート
	総探 普 3	「障がいのある人の避難」 ヘルプマーク申請書に記入することで、「災害時の避難所」で支援が必要であることに気づくことができた。 ・他の児童・生徒もヘルプマークを携帯していることを知り、自らも必要性を感じるとともに、申請をしようとする意欲につながった。	
	総探 普 3	「避難経路の確認・点検」 ・校内で自分が過ごす時間が長い場所を三か所選び、地震発生時の避難経路をそれぞれ考えた。	

	総探 普 3	「障がいのある人の避難」 ・大分市の HP 資料「災害時用配慮者の皆さんへ」・厚生労働省「視覚障害者のための防災・避難マニュアル」を読み「大分市確認カード」を実際に記入し、避難時や避難所で想定される困りを考えた。	
	総探 普 2	「防災食調理」 学習の内容 1. 防災食の調理 (1) 白飯：常温水とお湯で作ったものを食べ比べる (2) ヒートレスレトルトカレー：そのまま電子レンジで温めたものを食べ比べる 生徒の様子 (1) 全盲の生徒の中には、レトルトパックの切り口を見つけたり切ったりすることに時間を要する様子が見られた。 (2) 温めた方がおいしいという感想が多かったが、冷たいままでも食べられることを学ぶことができた。	
音楽部 部活動	普 3 専攻科 1・2	音楽大会前の防災事前学習 熊本地震から復興する熊本城を学ぼう 2016 年発生の熊本地震の発生状況や、被害、そこからの復興を学んだ。熊本城の被害状況と現在の復興した様子を実際に現地で見学する事前授業を行った。	

4 取組における成果と課題

(1) 成果

1. 防災教育の視点を入れた授業実践事例

防災の視点を例示、明確化して示すことで目標とする事例数は掲げてはいなかったが、10 例の実践が行われた。

2. 各種防災避難訓練

ア. 聾学校と同じ敷地内にある学校というところから連携し、訓練要項や、危機管理マニュアルをすり合わせながら合同避難訓練を行うことができた。

イ. 児童生徒を入れての訓練の前に（約 1 か月前）職員避難訓練を事前に行うことで、職員の動きがスムーズにできている。

ウ. 児童生徒職員が迅速に避難できており、児童生徒は教師の指示通り避難ができていた。

エ. 垂直避難の際、使用する階段を分けて、移動するように変更し実施してみたところスムーズに移動が可能になった。

3. 引き渡し訓練

ア. 視覚障がいのある保護者を含め、保護者の動きの確認ができた。

イ. 直近数年間では今まで引き渡し訓練を行っておらず、職員の役割分担、今回の訓練にて動きの確認ができたこと、危機管理マニュアルの見直しができたことが良かった点である。

（2）課題

1. 防災教育の視点を入れた授業実践事例

今年度は高等部普通科の事例が多く見られたが、専攻科も含めた他学部の積極的な防災教育の視点を入れた実践が行なうことが望まれる。

2. 各種防災避難訓練

ア. バギーの移動に関して、児童をのせたままの階段の垂直避難は危険が伴う。抱きかかえての移動も体重の重さから危険が伴う。今後、3～4名以上で安全に運ぶことが可能な担架等の準備が必要である。

イ. 特別教室棟 3 階から避難したが、実際地震が発生した場合、管理棟へ向かうドアが外れたり、ガラスが割れたり、移動に困難が生じると思われる。また、移動教室で授業を行う場合、理療科の生徒、職員にヘルメットを持参させるのか、購入して置くのか検討が必要である。

ウ. 持病のある生徒が発作を起こした場合、非常に時間がかかる可能性がある。

エ. 移動教室の場合、頭部を守る道具がない。全教室にヘルメットを置くのは現実的でないため、いざという時にヘルメットの代替ができるものなどないか考えておく必要がある。

オ. 職員の点呼について、口頭でのみ確認するのではなく、学部所属別の職員名表等を使用して、確実に点呼できるようにすることが必要である。

カ. 体育館には、聾学校の放送と盲学校の放送が両方入るため、放送の前には学校名を入れて話すことが必要である。

3. 引き渡し訓練

ア. 係り分担カードの裏にすべきことを記載しておくことが必要。年度当初に引き渡し事案が起きても、対応できるようにしたい。

イ. 引き渡し時記入用紙の記入方法や用紙の記載内容の見直しが必要である。すべて記入するのではなく、選択肢を設けて○をつけるなどの改善が必要である。

ウ. 各係分担とその内容の検討が必要である。（特に受付）

5 今後の取組の見通し

(1) 「今後の取組」次年度の重点

- ア. 盲・聾学校合同防災体制の継続・強化
- イ. 児童生徒の実態に即した訓練内容の充実
- ウ. 職員の役割分担と初動対応力の向上

(2) 具体的取組

- ア. 想定を絞った防災避難訓練を複数回実施
(地震、津波、移動教室利用時 等)
- イ. 訓練前の職員のみ事前訓練の継続
- ウ. バギー使用児童の垂直避難に備えた搬送方法・備品の検討
- エ. 発作等、医療的配慮が必要な場合の対応手順の共有
- オ. ヘルメットが使用できない場面での頭部保護の代替方法の周知
- カ. 点呼方法の改善 (所属別名簿の活用)
- キ. 合同避難時の放送方法の整理 (学校名を明示)
- ク. 引き渡し訓練の改善
 - ・係分担カードの充実
 - ・受付用紙の簡素化
 - ・長時間待機時の児童生徒のケア想定
- ケ. 防災研修を通じた防災意識の継続的向上